

# 詰将棋全国大会レポート（５）

詰パラ通巻 400 号記念  
第 5 回全詰連全国大会

1989年5月

名古屋市 名古屋郵政会館にて

参加者 84名

詰将棋パラダイス 1989年3, 6, 7月号より

主催／全日本詰将棋連盟

詰将棋パラダイス通巻400号記念

# 全国大会

〈日時〉平成元年5月5日(金)  
午後1時～7時(開場午前11時)

〈会場〉名古屋郵政会館  
(名古屋市西区天神山町4番1号)

■市バス…名古屋駅前・市バスターミナル・レモンホームより浄心行または砂田橋行に乗車、4区目押切町で下車、徒歩3分、西税務署前

■地下鉄…浅間町下車、徒歩15分

■タクシー…名古屋駅から7分

〈会費〉5,000円

\* \* \* \* \*

＝名古屋郵政会館宿泊予約受付＝

〈日〉5月5日のみ

〈料金〉一泊朝食付3,080円

〈定員〉20名

〈申込〉3月末日までに編集部へ

当日は、どこの宿泊施設も満室が予想されますので、格安料金の郵政会館をぜひともご利用ください。

なお、定員になり次第、締め切らせて頂きますので、申し込みはお早目にどうぞ。

巻通パラ詰  
400号記念

# 全詰連全国大会

時 / 5月5日 於 / 名古屋郵政会館



## ● 全詰連全国大会の足跡

回	と き	と こ ろ	参 加
1	昭和37年10月28日	伏見荘(名古屋市中区)	47人
2	昭和39年5月3日	伏見荘(名古屋市中区)	50人
3	昭和40年5月9日	七條兼三郎(東京上野恩賜公園内)	90人
4	昭和41年5月1日	日本女子会館(東京都港区)	55人
5	平成元年5月5日	名古屋郵政会館(名古屋市西区)	84人
6	来 年 の 予 定		

# 23年振りの大会、84人が集う

5月5日、通巻四百号記念全日本詰

伊藤三雄、桑原辰雄（読み上げ順）

将棋連盟全国大会が名古屋市西区の名

6、記念撮影

古屋郵政会館で開催された。全詰連の

7、お楽しみ競技

全国大会は昭和41年5月1日に東京都

「詰将棋次の一手名人戦」（全員）

港区の日本女子会館で行われて以来、

優勝||橋本孝治

実は23年振り5回目。北は福島から南

「早解きトーナメント」（16名）

となった。

優勝||山崎泰史、準優勝||宗岡博

大会当日の進行は次の通り。（敬称

之（作品提供・浦野真彦、柏川香

略）

悦、小西逸生、柴田昭彦、中田章

1、開会

「ばか詰タイムトライアル」（50名）

2、祝辞（宇佐見正、森田正司）

優勝||橋本孝治、柳田明（同点）

3、編集長あいさつ

三位||若島正（作品提供・小林看

4、自己紹介

空）

5、祝電祝詞披露

8、立食パーティー

鶴田寿美子、七條兼三、黒川一郎、

9、懇談、カラオケ

井島寛、小西逸生、柏川香悦、柴田

10、閉会

昭彦、中田章道、森信雄、浦野真彦、

詳しい模様は、来月号に清水一男氏

が報告する。

●寄贈者●（敬称略）

金二万円——詰将棋研究会

金二万円——創棋会

金二万円——佐藤宗弥

金一万円——(株)近代将棋社

金一万円——大橋健司

賞品——門脇芳雄

賞品——七條兼三

賞品——服部彰夫

賞品・茶菓——藤井国夫

ビール・ジュース——鶴田寿美子

茶菓——岡村孝雄

茶菓——高見秀夫

× × ×

【編集部から】

前頁の引き伸ばし写真（ハツ切サイ

ズ）を、ご希望の方に千共千円でお譲

りします。6月末日必着でお申し込み

ください。

今回の全国大会のご感想をお聞かせ

ください。来年も行う予定です、

●出席者●(敬称略)

福島 南倫夫  
 群馬 北川明  
 埼玉 橋本孝治、服部敦  
 千葉 飯山修、岡部雄二、栗山義  
 史、駒場和男、摩利支天  
 東京 井上裕、大橋健司、岡村孝  
 雄、岡本真一郎、門脇芳雄、金  
 子清志、佐藤宗弥、角建逸、相  
 馬康幸、藤井国夫、森田正司、  
 山崎泰史、吉橋和夫  
 神奈川 飯尾晃、近藤郷、佐藤正  
 義、塩野入清一、鈴木章夫、鈴  
 木龍晴、清野広美、星野健司、  
 森敏宏、柳田明  
 長野 小林看空  
 岐阜 飯田繁和、篠田義雄、三輪  
 勝昭、柳原裕司  
 愛知 東英男、伊東郁、岡本正貴、  
 木村詢、酒井克彦、鈴木芳己、

関半治、成田忠男、服部彰夫、  
 深津芳将  
 三重 坂口敏昭、清水一男、田原  
 宏、森美憲  
 滋賀 清水晴彦、本間晨一  
 京都 上田吉一、太田慎一、大原  
 利生、田代達生、中島和男、山  
 下雅博  
 大阪 明石六郎、川崎弘、高坂研  
 塩田洋、野田達志、浜田博、弘  
 光弘、山名厚、若島正  
 兵庫 宇佐見正、小笠原哲也、富  
 永晴彦、中嶋弘、藤倉満、安平  
 昭二、吉田健  
 奈良 岩本修、岡田敏  
 島根 高見秀夫  
 広島 佐藤達也、須川卓二、広中  
 亮一  
 福岡 江崎正美  
 大分 宗岡博之

▼お詫び▲

先月号「工学母艦③」の11は、編集部のミスで持駒が間違っておりまして。左に正しい図を掲げます。本作のみ締切を6月末日消印としますので、追加解答をお願いします。

持駒 桂香歩歩

一 二 三 四 五 六 七 八 九

										11
										9
										8
										7
										6
										5
										4
										3
										2
										1
桂	香	銀								

同じく先月号90頁、フェアリーランドのマスケットバッグ当選者に加賀孝志、和田裕之両氏を追加します。

▼今月の香龍会 6月18日(日)午後1時、名古屋郵政会館

# 第5回 全詰連 全国大会

レポート  
清水一男



詰将棋バラダイス創刊四百号を記念する全国大会が催された。

平成元年五月五日、名古屋市西区の名古屋郵政会館に、全国から84名の会員が参加した。

会場は名古屋城の近くにあり、第一期龍王戦第一局の行われたホテル、ナゴヤキャッスルとは目と鼻の所に在る。編集長から当日の司会を依頼された。固辞する美徳を最近おぼえたが、編集長には逆らえない。さらに、「レポーターも頼みます」とダブルパンチ。

84名の信条、情熱を伝えるには、準

備不足で、上ッ面だけの報告ですが、ご了承下さい。

50 ↓ 60 ↓ 84

気温20度と高いが、晴天で絶好の大会日和となった。

10時10分会場に着く。この日は仏滅である。だから会場となった名古屋郵政会館は、結婚式は一組もなく、バラの貸切り同様である。

飯田繁和氏と高坂研氏が受付の準備をしている。「ヤア」と短い挨拶をし

てメイン会場に入る。

すでに大盤があり、その前に三人いて、人の手ほどの駒を動かしている。田原宏、服部彰夫、関半治の三氏。会話は難解でわからない。

壁面にプログラムと賞品、祝儀の芳名を書いたものが張り出してある。編集長は音響装置の調整中。やがてこの会場に、全国から詰将棋ファンが集ってくるかと思うと、胸が躍った。

11時受付開始。川崎弘、吉田健、篠田義雄などベテラン各氏の到着が早い。編集長は若手が遅いので、少し気を揉んでいた。

ベテランは受付を済ますと、会場に移り適当な場所に席を構える。若手はロビーで二、三人立ったまま話を続けている。名古屋の栄のセントラルパークや、クリスタル広場でよく見かける光景である。長身の若者の立ち姿はいものだ。

開会15分前、別室で編集長と司会進

行の打合せを終えて会場へ来てみると続々と参加者が集っており、急拠、席を増設。世話人は参加者50名と見込み、東京からの新幹線車中では60名の予想、実は84名。うれしい悲鳴をあげた。

天井からカメラをのぞいたとすれば詰キストの押し寿司が五本(列)、窮屈そうに並んで見えたに違いない。

これから50年

いよいよ開会。創棋会を代表して宇佐見正氏、詰将棋研究会の代表森田正司氏が祝辞を述べる。

各地に詰将棋の会が幾つかあって、その母体ともいうべき集団が全日本詰将棋連盟だと聞く。そこで東西の老舗の会からお二人の登場となった。

宇佐見正氏は「バラの限らない発展と会員のバックアップ」を、森田正司氏は「全日本詰将棋連盟の活性化」をそれぞれ強調された。

全国的な規模での大会は、昭和37年

に名古屋市で開かれたのが最初であり、柳原編集長は、まだ生れていない。

バラは不死鳥といわれ続けてきたが、改めてその生命力に驚くばかりである。

編集長が挨拶に立つ。紋切型でなく端々とした冷静な口調で「あと50年は頑張ります」と心強い言葉が出た。

この一言を聞いて「今日、ここに來て、よかった」と感じた人が何人かいたと思う。鶴田主幹からバトンタッチ

してから三年、順調にバラを発刊してきた実績から、約束は必ず守ってくれ

ると信ずる。

自己紹介

この際とばかり、長々とやられては

時間がかかってしまう。又、名前だけ名乗るのでは味気ない。要領よく、中

身の濃い自己紹介をと祈る気持で新婚ホヤホヤの飯田繁和氏をトップに指名、

以下二時間余り続くことになる。

84名の参加者の中で、受付の記帳にペンネームで書いた人は4名いた。心

得たもので、いずれも本名よりペンネームの方が有名な人ばかりだ。

「私が岩本修です」といわれども、こちらはキョトン。「酒井克彦です」といっても、ハテナと思う人もある。

心配無用、自己紹介では本名のホンヤク付きで微笑ましかった。

A—実は、鶴田さんのゴーストライターをやったことがあります。

B—柳原編集長が鶴田主幹と同じ齡まで頑張って、千号まで出して下さい。

C—私はおりませんが……。

新人類のみなさん。

D—入選三百回を目標にしています。

E—作品集出版の準備をしております。

F—七條さんの気持は、七條賞、鶴田賞にバックアップしてくださると承知しています。

G—司会が清水さんと知って急に参加  
しました。

全部思い出せないが「読者サロン」

6	5	4	3	2	1	
		銀	科	王	将	皇
				角		
					歩	
		将			歩	歩
		金				

持駒 飛角歩歩

53角、32玉、42飛、33玉、44飛成、  
22玉、31角成、12玉、23歩成、同  
玉、41馬、32角、35桂、12玉、13  
歩、同玉、33龍、14玉、34龍、24  
香、32馬、同銀、36角、25歩、同  
角、13玉、14歩、22玉、23歩、21  
玉、32龍、同玉、33歩、同玉、44  
銀、32玉、43角成、同銀、同銀成、  
21玉、22銀、12玉、13歩成迄43手。  
(将棋時代S 25・2 太田昭男作)

より新鮮味も親しみも、たっぷり含ん  
でいた。

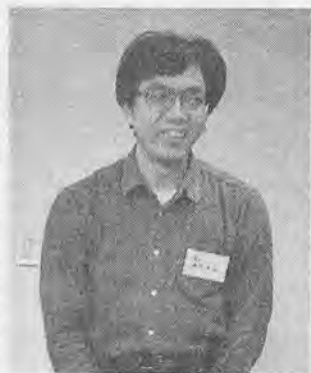
### 詰将棋次の一手名人戦

NHK TVで放映された「将棋の日」  
の企画を真似たもの。全員が青、黄、  
白の札を持ち、一手一手いずれかの札  
を上げるゲーム。

上の図が問題。大盤に並べられて、  
服部彰夫氏と森美憲氏がいわゆるサク  
ラとなり、「36角」、「24香」と声を  
張り上げる。その都度、84名が札を示  
めす。考慮時間は実質なし。トント  
ンとやらないと詰みまで読まれてし  
まう。

酸いも甘いもかみ分けた服部彰夫氏  
が真剣に正解を追い、若手の森美憲氏  
がおとぼけ十分の手をガイドする。面  
白い人選だった。  
だんだん正解者が少くなり、大詰め  
は、柳田明、角建逸、飯尾晃、橋本孝

◀ 次の一手名人戦優勝は橋本孝治氏



治の四氏が大盤の前に公平に立ち並ん  
だ。いずれも関東勢である。結局、詰  
将棋次の一手名人は、橋本孝治氏に輝  
いた。

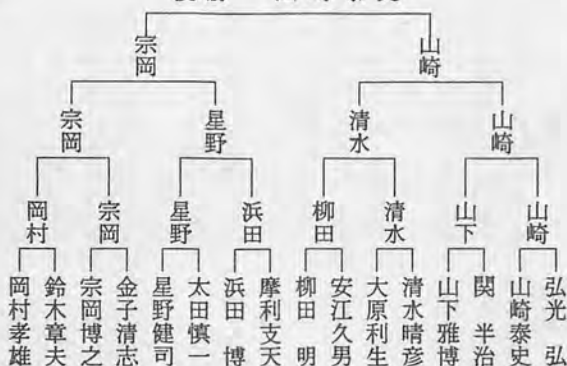
氏曰く「カンの冴えです」。

### 早解きトーナメント

瞬時に解くのも芸のうち。力自慢な  
らず、頭自慢の16名が前に出る。メン  
バーは組合表のとおりだが、目を見張  
る顔ぶれである。



優勝 山崎 泰史



専門誌の解説者、アマ名人級の実力者、解答のベテラン、摩利支天氏をはじめとする若手有望株とそろい、興味深々たるものがある。

一回戦の柳田明、安江久男両氏の激突が事実上の決勝戦かと直感。又、関半治氏も一発秘めて有力とみた。競技用の作品は、全部で15題必要で



トーナメント決勝は山崎君（右）と宗岡君

次の皆さんから提供があった。大会の祝詞を兼ねた新作で、落し穴も、ハツとする手も入った佳作ぞろい（新聞等に出品予定もあり、お見せできないのが残念）。柏川香悦、小西逸生、柴田昭彦、浦野真彦六段、森信雄五段、中田昭道五段の各氏。

特長としては、早く詰めた方に案外誤りがあったこと、又、変化に好手がある、そちらを答えるケース。合駒の選択間違いなどである。

私も予想を誤った。もっと、若手を高く評価すべきだった。優勝は、山崎泰史氏の頭脳に輝く。山崎氏は、十秒以内で答えたのが二回あり、すばらしい。

バカ詰とガーデン

バカ詰の大家、小林看空氏が登場。いき入れるため、庭に出た。バカ詰は若手の得意種目、ベテランの何人か

が、バカ詰開始を機に庭におりた。芝に直接すわって、足を伸す人、たばこを吸う人、初対面の挨拶を交わし、話が弾む。だんだん人が増え、遂には盤を持ち出し、芝生の上で対戦がはじまる。

トランプをめくりながら一手指す。盤の中間に板が立っている。初めて見るゲームのやり方だ。つい立将棋とか、トランプ将棋というものらしい。今、流行しているとか。名古屋を長く離れているうちに、情報に疎くなってしまうた。

関西の人達とは創棋会との関係で、顔馴染が多いが、関東の人達とは近づきが少ない。門脇芳雄、森敏宏、駒場和男、湯村光造の各氏は、自分が若い頃、すでに大活躍されており、近寄り難い気がしたが、気軽に話しかけてくださり、うれしかった。同好の集いに、年令も実績も気にする必要のないことがわかった。



持駒 角銀

さて、バカ詰コーナーへ移動してみた。競技終了直前のごとくだ。

「タイムトライアル、5手詰、24題」。事情がよくわからず申し訳ないが、小林看空氏の講評によると、第13図(別図)が難解だったとか。この難問をクリアしたのは、府中グループ(岡本真一郎氏ほか)の皆さんで、詰むや詰まざるやの問題に断を下したようなものか。

優秀者の表彰は、若島正、橋本孝治、山崎泰史、柳田明の各氏。ここでも、

若手の活躍が光っている。

懇親会

自己紹介のとき、「午後10時までOKです」と案内したが、もう午後5時になってしまった。楽しい時間の経つのは早いものである。

服部彰夫氏の乾杯の音頭で、立食パーティが始まった。立食パーティは自由に動き回ることができ大勢の時は都合である。昭和37年の伏見荘の宴より整然と運んでいるように思えた。

幾つかの輪が出来、会話が弾む。食べ物、飲み物より一番の御馳走は詰棋談議のできることだ。

9年前、秋葉原ラジオ会館での米長指導対局の坂口敏昭氏(私が観戦記)、すっかりスリムになった北川明氏とは久し振りの再会。

また、同入室解説担当の時、検討をお願いした安江久男氏、福島南倫夫



氏は初対面だった。

詰棋談義に花が咲き、酒が入るにつれて、カラオケも始まる。印象に残ったのどをあげると、佐藤宗弥（歩）、

安平昭二（憧れのハワイ航路）、編集長（大阪ラプソディー）、門脇芳雄

（影を慕いて）、若島正（長崎は今日も雨だった）、摩利支天、岡村孝雄のデュエット（チャコの海岸物語）……盛り上りました。

そして森田正司氏が「詰バラ王将節」を合唱しようと云い出す。村田英雄の「王将」の替え歌で、23年前の東京での全国大会で鶴田主幹が同じように音頭をとった因縁がある。

最後は、柳原編集長が「五百号に向けての決意を改めて披露、併せて、会員諸氏の支援を切望」して幕を閉じた。

### 番外異聞

本当に午後10時になってしまった。宿泊予定者は、それぞれ小部屋に落着いたらしい。「寝巻がない」、「布団が足らない」、「夜食は？」など聞えてくる。宿泊者の予定は23名、それが32名に増えた。

閉会直前まで数がつかめず、結局、

朝食は9名分足りないことになった。だれかが朝食にありつけない。食い物の恨みは恐ろしいゾ。

あとで聞いてみると、ベテランと若手は食べたようで、オジサン族が食いはぐれたとか。

又、宿泊のほとんどの人が徹夜で研究と論議を続け、何んことはない、布団も枕も邪魔になったようだ。

先見の明というべきか、超ベテランの数名は、静かなホテルに移動、この軽快さは岡田流に似たり。

◎5月5日の祝日に、貸切りの状態で会場をとれたのは幸運でした。会場がせまく、不便、不自由だったと思います。それなのに、不満もお叱りもなく、皆さんのご協力により楽しい集いとなりました。心からお礼申し上げます。また、香龍会にもおいで下さい。